

タイ人初中級話者の「N₁のN₂」の使用
——発話時に見られる誤用「N₂のN₁」を中心に——

水野 吉徳

1. はじめに

日本語学習者の発話に見られる誤用の中には誤用だとわからないものがある。下の会話を見られたい。タイ人日本語学習者（以下、学習者）Sの発話を解釈すると店が2つ以上あり、それらの一番後ろの店で食事したことになる。しかし、Sの発話意図は店の一番後ろで食事したことなのである。

T: どちらでお食事されましたか?

S: 一番後ろの店だと思います。

Sの返答は「一番後ろの店」ではなく「店の一番後ろ」が正文となる。しかしながら、「一番後ろの店」でも解釈が可能であるため聞き手は誤用とはわからないこともありえる。発話意図が正確に伝わらないこれらの誤用はコミュニケーションに支障をきたす運用上の誤用だといえる。本稿では初中級学習者の発話に見られる「N₁のN₂」の誤用である「N₂のN₁」の分析を試みる。

2. 「N₁のN₂」の先行研究

「N₁のN₂」の「ノ」は、格助詞、連体助詞等と呼ばれている。国立国語研究所（1951）では「ノ」の分類を試みている。しかし系統立てた分類とは言い難く、その使用が列挙されているのみである。このような分類は「きりがいいだけでなく、あまり意義があるとは思われない（寺村1991:240）。」寺村（1995）が言うように意味論からだけでは「完全に全ての型を文法の範囲で捉えることは不可能（同上）」であろう。「田中さんの本」という表現は一見問題がないように思えるが、「田中さんが買った本」「田中さんが書いた本」「田中さんが表紙に写っている本」など文脈が違えばその解釈もさまざまである。つまり、「N₁のN₂」は意味論だけでは解決できず、語用論的に意味が補充されて適正な意味となるのである⁽¹⁾。

西山（2003）では「N₁のN₂」を5タイプに分け、意味論のみで解釈できるものと語用論的に意味が補充されるものに分けている⁽¹⁾。上の「田中さんの本」の言語的意味は「NP₁と関係Rを有するNP₂」⁽²⁾というものでRは文脈により補充されるとしている。このようなタイプをタイプAと呼んでいる。

次に、タイプBは「NP₁デアルNP₂」という意味になる。「富山出身の教師」は同格の「ノ」で

「富山出身であり、教師でもある」という意味である。タイプ B は「NP₂は富山出身 (NP₂) ある」という文の表層構造であるといえる。タイプ B かどうかは加藤 (1998) が呼ぶ装定述定転換テスト「教師は富山出身だ」ができるかどうかで決まる。

続いてタイプ C は「時間領域 NP₁における NP₂の指示対象の断片の固定」という解釈である。N₂の時間上の指定を N₁が受け持っている。「小さい時の私」というのは「私」の時間的領域を N₁「小さい時」で指定したものである。

4 番目はタイプ D である。「非飽和名詞 (句) N₂とパラメータの値 N₁」の解釈である。非飽和名詞とは参照点がないと意味として完結できない名詞をいう。「大学の隣」では「大学」という参照点 (パラメーター) があって初めて意味をなす⁽³⁾。また「主役」という名詞も「田中は N₁の主役だ」というように「N₁の」がないと意味が不十分となる。

最後はタイプ E で、「行為名詞 (句) N₂と項 N₁」という解釈である。「仏様の教え」「hi5 の流行」というのは、前者が「仏様が教えること」であり、動詞「教える」を N₂の名詞に変化させた形式である⁽⁴⁾。後者は「hi5 が流行する」という文に開くことができる。どちらも N₁が主語で N₂が行為を表す。

(1) タイプ A : NP₁と関係 R を有する NP₂

タイプ B : NP₁デアル NP₂

タイプ C : 時間領域 NP₁における NP₂の指示対象の断片の固定

タイプ D : 非飽和名詞 (句) N₂とパラメータの値 N₁

タイプ E : 行為名詞 (句) N₂と項 N₁

3. 「の」と「khong」

「の」と「khong」の対照研究としてソイスダー・上田 (2000) を概観する。ソイスダー・上田 (ibid.) では学習者の「の」の誤用を「khong」との関係から考察している。学習者によって書かれた 142 編の作文の中で見られた誤用を分析した結果、①不要な「の」を付加した例、②「の」が脱落した例、③「の」と他の助詞との混同の 3 タイプの誤用が確認された。その件数が下表 (2) である。表によると「不要な「の」の付加」が 50% 近くあり、ついで「他の助詞・表現の混同」が 35% 程度あり、「「の」の脱落」が 18% あった。これらの誤用はタイ語「khong」からの不の転移があるものと推測されている。そして、日本語訳文中ではほとんどの「khong」は「の」に置き換えられるが、「不特定な時間」に関しては「の」が使用できず、誤用につながるケースがあることがわかった。また、この論文では発話上に見られる「N₂の N₁」の誤用は推敲できる作文からの誤用分析であるためなのか「N₂の N₁」の誤用については一切述べられていなかった。

表1 「の」の誤用の3タイプの件数

誤用のタイプ	誤用の件数 (%)
不要な「の」の付加	46 (47)
「の」の脱落	18 (18)
他の助詞・表現との混同	34 (35)
合計	98 (100)

しかしながら、「の」の誤用が「khong」の影響から来るものであるならば、ほぼ半数を占める「不要な「の」の付加」誤用の説明ができないのではないかと。ソイスダー・上田 (2000) で述べられているように『『の』を多用しようという学習者の傾向: 135』は「khong」の影響によるものなのか疑問である。それよりも名詞の連続を避けようとする心理的な「の」の添加だと考えられないだろうか。下の (2) は論者がインタビューした発話であるが、「王朝、パヤオ」は名詞連続であり、タイ語の語順となっている。その後、日本語の語順にし、「の」を付加し、「パヤオの王朝です」と自己訂正している。

(2) 「王朝、パヤオ…パヤオの王朝です」(19A10)

表1で「不要な「の」の付加」と「他の助詞・表現との混同」の2つで82%もの誤用がある。このことから学習者の名詞の連続を回避するストラテジー（名詞連続回避ストラテジーと呼ぶ）が示唆されよう。

4. 調査内容

OPI 形式の会話試験⁽⁵⁾で初級の中（初級-中）から中級の上（中級-上）と判断された31名の発話に見られる「N₁のN₂」の誤用「N₂のN₁」にしぼって分析した。これらのレベルは何とか文発話ができるようになった段階から段落単位の発話も時々見られる段階の話者である。4.1で誤用の分類を試みる。その後、各タイプの誤用を見ていく⁽⁶⁾。

表2 調査人数と「N₁のN₂」の使用数

初級-中	初級-上	中級-下	中級-中	中級-上	合計
1	11	5	9	5	31名
6 (6)	114 (10)	87 (17)	130 (14)	111 (22)	448例

※ () は各レベルの平均使用数

表 2 では、中の段が人数で、下の段が「N₁ の N₂」の使用数である。() はひとり分の平均使用を示している。レベルが上がるごとに「N₁ の N₂」の使用も増えているのがわかる。

4.1 誤用の分類

第 2 章で見た西山 (2003) の 5 つの「N₁ の N₂」タイプのほかに 2 タイプを加えた。タイプ F として「6 番の寮」のような「数量詞ノ N₂」を設けた。そして、形式名詞の「こと」、節を作る「とき」をタイプ G とした。⁽⁷⁾

(3) タイプ F: 数量詞ノ N₂

タイプ G: N₁ ノこと N₁ ノとき

(4) の文は全て、「N₂ の N₁」の誤用である。上の分類で 68 例の誤用が見られた。次頁の表 3 を見ると、タイプ D が 34 例 (50%) で一番多く、ついでタイプ A 24 例 (36%) となった。タイプ A と D を合わせて誤用の 86% を占めた。

(4) 1. タイプ A の誤用

「*ホテルの山があります」(3A7⁽⁸⁾)

2. タイプ B の誤用

「*先生の韓国人が、あります」(10B7)

3. タイプ C の誤用

「*今晚 (晩⁽⁹⁾) の月曜日」(16C1)

4. タイプ D の誤用

「*上の山、リゾートが、あります」(3D6)

5. タイプ F の誤用

「*部屋のふたつがあります」(11F4)

その他ではタイプ B が 5 例、タイプ F が 3 例、タイプ C が 2 例、そして、タイプ E、タイプ G の誤用は見られなかった。タイプ E、G の誤用がなかったことについては後章で述べる。なお、数値は延べ語数ではなく、異なり語数の数値である。

表3 タイプ別の誤用数

タイプA	タイプB	タイプC	タイプD	タイプE	タイプF	タイプG	合計
24 (36%)	5 (7%)	2 (3%)	34 (50%)	0 (0%)	3 (4%)	0 (0%)	68 例

4.1.1 タイプAの誤用

タイプAはNP₁とNP₂の関係が語用論的に処理されるものであり、N₁とN₂の関係は文脈により解釈される。下の例文(5)は「ウッタラディットに住んでいる人」という意味であり、(6)は「ウドンターニーという県」という意味である。また(7)は「ファッションのことが書かれている雑誌」であり、(8)は「祖母が住んでいる部屋」となろう。(9)をそのまま解釈するといささかグロテスクになるが、「ネコが食べるエサ」という意味である。

- (5) 「*人のウッタラディットは、優しいし、上手な人です」(5A13)
- (6) 「*高校は県のウドンターニーです」(6A24)
- (7) 「*雑誌のファッションです」(8A36)
- (8) 「*部屋の祖母があります」(16A32)
- (9) 「*⁽¹⁰⁾パオズというやわらかい料理のネコ」(17A41)

例文(9)は少々驚くが、文脈で意味が獲得できるため、コミュニケーション上で致命的な誤用とは思わないと思われる。逆に言えば、タイプAの誤用は意味を成さないため聞きかえしができるのである。

なお、上の例に挙げた5つのうちタイ語の「khong」に訳せるものは(8)のみであるが、その(8)のタイ語訳も「khong」が任意となる。

4.1.2 タイプDの誤用

誤用で一番多かったのがこのタイプDである。タイプDは非飽和名詞N₂とパラメータの値N₁の関係にあるタイプである。N₂には位置詞や親族名称、役職名などが入ることが多い。

- (10) 「#そばの、カンモウです」(4D8)
- (11) 「#真ん中の部屋に、ベッド…」(9D27)
- (12) 「*名前前の高校は…ウッタラディットダミルです」(10D31)
- (13) 「#夫の彼女は、都市の〇〇た」(22D10)
- (14) 「#友だちの学校で、一緒に行きました。」(30D24)

上の(10)(11)は位置詞の誤用の例である。(10)は「カンモウ(大学横)のそば」、(11)は「部屋の真ん中」の誤用であるが、両誤用は言語形式的意味として成立可能なため発話意味とは違う解釈に処理されてしまうだろう。(10)は「アパートはどこにあるか」という問いによる答えであるが、カンモウが2つある解釈になってしまう。また(11)は「部屋に何があるか」という問いである。この答えではほかの部屋にはベッドがない解釈になる。聞き手が誤用だとわかれば聞き返しができるが、(10)(11)のような誤用は聞き手が誤用だとは気づかないやっかいな誤用なのである。(12)では「Xの名前」の誤用である。(13)(14)は相対的な人称の誤用である。(13)は「彼女の夫」、(14)は「学校の友だち」の誤用である。どちらも別の解釈を促しかねないものである。32例あるタイプDの誤用の内わけが下の表である。

表4 タイプD内の誤用分布

位置詞	名前の N _i	相対人称	その他	合計
19 (56%)	7 (21%)	3 (9%)	5 (15%)	34 例

表4を見ると、半数以上が位置詞の誤用が占めているのがわかる。位置詞の誤用は全誤用68例中でも28%にあたる。母語であるタイ語の語順からの影響のみではなく、その抽象性ゆえの誤用とも考えられるだろう。また、後述するが構文スキーマが出来上がっていないとも考えられる。そして次に多いのが「Xの名前」の誤用で7例見られる。「X」が「バス」「高校」「本」「魚」「歌」「俳優」「スコータイ市内」の語順が間違っていた。ついでその他の誤用が5例、相対人称の誤用が3例見られた。なお、(10)～(14)の誤用のうち(12)(13)はタイ語訳では「khong」が使用できるが、これらも任意となる。

4.1.3 その他のタイプの誤用

(15)(16)がタイプBの誤用、(17)がタイプCの誤用、そして(18)(19)がタイプFの誤用である。いずれもタイ語の「khong」には訳せないようである。(16)は「チョンという魚」ととれなくもないが、「魚であるチョン」という意味であろう。

(15)「先生の韓国人があります(います)」(10B7)

(16)「チョンの魚」(15B2)

(17)「タイの昔、〇〇<人物>はラオス軍と戦争をした」(22C3)

(18)「職業のロット(6つ)が、選べます」(16F2)

(19)「バスの12番」(26F2)

そして、上の5例はいずれもタイ語の語順と同じとなり、名詞と名詞の間に「の」が入っている。

4.2 調査結果

「 N_2 の N_1 」の誤用を分析した結果、タイプD「非飽和名詞（句） N_2 とパラメータの値 N_1 」の誤用が50%に及ぶことがわかった。その中でも位置詞の誤用が19例あり、全誤用の28%であった。また、ほとんどの「の」がタイ語の「khong」に訳せないか、または任意であることがわかった。下の表5、表6を見てもらいたい。

表5 各レベルのタイプ別の使用数

	A	B	C	D	E	F	G1	G2
初一中	3			1	1			1
初一上	62	9	2	33	2	4		2
中一下	46	5	1	27		2	3	3
中一中	83	4	8	24	1	4	5	1
中一上	67	2	1	24		1	11	5
計	261	20	12	109	4	11	19	12

表6 各レベルのタイプ別の誤用数

	A	B	C	D	E	F	G1	G2
初一中	1			1				
初一上	6	3		11		1		
中一下	5	1	1	11		1		
中一中	9		1	6		1		
中一上	3	1		5				
計	24	5	2	34	0	3	0	0

表5は各レベルのタイプ別の使用数で、表6は各レベルのタイプ別の誤用数である。タイプA（261例）の使用が一番多く、ついでタイプD（109例）が多い。そして、タイプDはすべてのレベルで使用され、誤用も見られる。しかしながら、誤用数ではタイプAとタイプDが逆転してしまう。タイプDはその使用の31%が誤用となる点に注意されたい。いかにタイプDの誤用が多いかがわかる。

4.3 考察

ここではタイプ E とタイプ G の誤用がなかったことと「 N_2 の N_1 」の誤用について触れてみたい。表 3 で見たようにこの 2 つのタイプに誤用が見られなかった。それはこれらのタイプは構文スキーマができていないからではないだろうか。タイプ E の出現が 4 例にとどまったが、それが下の (20-1~4) である。(20-1) は「X を勉強する」「X の勉強」の 2 つ考えられるが、後者の構文のスキーマ化ができていないと考えられる。そして、タイプ G は「X のとき」「X のこと」という構文スキーマで固定されていると思われる。それが (20-5)「*食べるの時」、(20-6)「??わたしのこと」のような誤用を起こしているのであろう。

- (20) 1、「タイ人 (タイ語) の勉強」(1E1)
- 2、「漢字の覚え方」(4E2)
- 3、「家族の迎え」(6E4)
- 4、「仏教の教え」(19E1)
- 5、「*食べるの時は、この水を入れてミックス」
- 6、「??弟は私のことになりたいと思います」(29G1-5)

しかしながら、位置詞には、例えば「左」を例にとると「～を左に・へ曲がる」「～の左に・へ」「～は左だ」のようにいくつかの構文にまたがっている。それで「X の位置詞」という構文スキーマの作成ができていないのかもしれないことが考えられる。

また、「 N_2 の N_1 」の誤用が、作文を使ったソイスダー・上田 (2000) の調査で出てこなかったのはなぜだろうか。それは、迫田 (2008) で述べられているように「 N_1 の N_2 」形式が中級話者のレベルでも統制的処理から自動的な処理に移行できていないからであろう。作文では問題がなくても会話というオンライン上での情報処理能力が限られるため、母語の語順で名詞が表出されてしまう。その際、名詞連続回避ストラテジーが働き、「 N_2 N_1 」の間に「の」が付けられる。ただし、この「 N_2 の N_1 」の誤用も上級話者になるとなくなる⁽¹¹⁾ ため、「 N_2 の N_1 」の誤用は中級話者の誤用としてマークされてもいいのではなかろうか。

4. さいごに

初級-中から中級-上の 31 名に見られた「 N_2 の N_1 」の誤用を分析した。その結果が下 (21) である。

- (21) ・タイプ D 「非飽和名詞 N_2 とパラメータの値 N_1 」の誤用が半数を占めた。
- ・タイプ D の中でも位置詞の誤用が全誤用の 28% にも及んだ。

- ・ほとんどの「N₂のN₁」が「khong」に訳せないか、その使用は任意であった。

また、タイプDの誤用には誤用とわからないものが多く含まれ、コミュニケーションに支障にきたす恐れがあるものがあつた。教育的見地から考えてこの誤用は重要な事項となろう。さらに、「N₂のN₁」の誤用は中級話者に多く見られる中級話者の誤用であり、「の」の使用が名詞連続回避ストラテジーに関係しているのではないかと示唆された。

今後の課題を述べる。今回の調査は何といっても調査人数が少ないため、上で述べたことを一般化はできないであろう。「N₁のN₂」の非誤用も含め、調査人数を増やさなければならない。また、心理的な「の」の使用として名詞連続回避ストラテジーという仮説を立てたが、被験者に対してフォローアップ・インタビューで使用動機を確認する必要がある。

注

- (1) 語用論的な処理は「N₁のN₂」だけでなく、「赤いボールペン」のような修飾語が名詞以外でもされる。「赤いインクのボールペン」なのか「表面が赤いボールペン」なのかは文脈による。
- (2) NP (Noun phrase) というのは名詞句であるが、当論文では「N」とだけ表示する。
- (3) もちろん完全に自立している名詞などない。「すべての語は、その背後に百科事典的な知識を前提とするので、完全に自立的な語というものは存在しないが、それでも意味的な自立性の高い語と低い語が存在するのは事実である (ジョン・瀬戸 2008 : 126)」
- (4) 「教え」が行為名詞に分類されるか議論を必要とするが、動詞から作られる名詞としてこの範疇に入れた。
- (5) OPI とは ACTFL (American Council on The Teaching of Foreign Language: 全米外国語教育協会) によって開発された、インタビュー形式の会話試験である。初級の下から超級までの 10 レベルに分かれる。判定は論者が行った。
- (6) ほかの誤用として以下が見られた。これらの誤用はソイスダー・上田 (2000) を参照されたい。ただし①に見る語順の誤用については述べられていない。
 - ① 「所、旅行が多いです」(「の」の脱落と語順の誤用)
 - ② 「*寒いの花」(不要な「の」の付加)
 - ③ 「*ロマンティックの映画」(他の助詞と混同)
- (7) その他に付随的な情報が N2 に来るもの (i) や、名詞間に格助詞が入ったもの (ii)、ガノ交換 (iii) ができるものなどが挙げられる。
 - i イワンのばか
 - ii 宇宙への旅立ち

iii 歴史の (ガ) 古い町

- (8) 「N2 の N1」にはすべて番号をふった。(1A2) とは 1 番目の被験者がタイプ A を発話している。最後の番号は各レベルのタイプ別通し番号である。
- (9) () 内は正用 (発話意味) を表す。
- (10) 「#」は別の意味解釈を表すこと。
- (11) 数名の上級話者と判断された被験者には「N2 の N1」の誤用は見つからなかった。

参考文献

市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』 凡人社

加藤重広 (1998) 「複数の品詞機能を兼務する形態素の統辞タイプ」『富山大学人文学部紀要』28 : pp.1-30

国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞、助動詞』 秀英出版

迫田久美子 (2008) 「学習者はなぜ間違えるのかー学習者の誤用から教え方を学ぶー」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要第 5 号』 国際交流基金、pp.1-15

寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版

西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論-指示的名詞句と非指示的名詞句ー』
ひつじ書房

村田美穂子 (2005) 『文法の時間』 至文堂

ソイスダー・ナラノーン 上田広美 (2000) 「タイ人日本語学習者による誤用ー「の」と「khong との比較」ー」『日本語教育のためのアジア諸言語の大役作文データの収集とコーパスの構築』
国立国語研究所、pp.132-143

ジョン・R・テイラー 瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』 大修館書店